

ステロイドの副作用を知り「病院は良くなるどころ、
医師は絶対、薬は良いもの。」という価値観が一変。

「ステロイド剤を16年使っていました」

吉川みさ子 44歳

2016年7月25日

● 幼少から松本医院に出会うまで

私は生後4カ月でアレルギーがあると診断されました。成長したら喘息になるかもしれない、気をつけるようにと言われたそうです。(アトピーという言葉は、まだあまり知られていなかったとのこと。)

幼いころは肘と膝の内側が常に痒く、湿疹と乾いて黒ずんだ状態とを繰り返していました。私にとってはその状態が普通で、姉や友達の肘の内側がキレイな肌色なのを見て、不思議に思ったことを覚えています。入浴後には必ず、湿疹箇所に「オイラックス」を塗られました。しみてピリピリと痛むので、「オイラックス」は怖かったです。後は何でも食べ、外で何でも触って遊び、普通に生活していました。

ステロイド剤を使いだしたのは、小学4年生頃からです。手指にポツンと水泡ができました。潰してみると痒くてたまらず、それは次第にじゅくじゅくして手に広がっていきました。この時に、よく効くからと母親が買ってくれた薬が「フルコート」です。最初はたまに、ほんの少しずつ塗っていました。母親から値段が高いから節約するように、そしてなぜか「フルコートは怖い薬。使い過ぎないように」と言い含められていたからです。ですが、それでは間に合わなくなっていきます。

塗れば魔法のように良くなる→しばらく経つと、痒くじゅくじゅくしてくる→塗る、また繰り返す・・・を繰り返すうちに、徐々にサイクルは短くなりました。あげく、就寝前には毎晩、フルコートをハンドクリームのようにべたべた塗るようになりました。

ついでに顔に塗っていたら、次第に顔に赤みが目立つようになりました。6年生、修学旅行の写真には、赤いまだら模様の顔をして写っています。この頃は、生理が始まれば体質が変わってアトピーは治る、と言われていました。それを信じていつか良くなるのだらうと、せっせとフルコートを塗りたくりました。しかし、中学生になってからも手の痒みはどんどん激しくなりました。授

業中も我慢できずにかきむしる程でした。激しくかきむしると、皮膚が剥けて、汗がにじみ出ます。かきむしった後の手は熱っぽく腫れて気持ちが悪いのです。手指がひび割れるようにもなりました。夜間も寝ながら手をかきむしっていたので熟睡していなかったと思います。

中学2年生の時、初めて皮膚科医を受診しました。よく効くと近所で評判の医院でした。以降ずっと成人してからもこの医院へ通いました。その頃は、薬の名前を知らされなかったので、何を塗っていたのかは分かりません。この医院では主に3種類の塗り薬を渡されていました。普段塗る半透明の軟膏、皮膚が剥けてひどい時の青い軟膏。これは塗った後に包帯を巻いて手当てしました。そして「必ず3日で止めるように！」と厳重注意と共に渡される、小さなケースの軟膏です。社会人になってからは、錠剤の飲み薬が加わりました。

でも、手はずっと痒いまま。顔も赤くガサガサのサメ肌になっていき、お化粧品もままならなくなりました。何かがおかしいのでは・・・と微かに不安を感じるようになり、何となく医院に通う回数が減りました。

20代半ば、「どうしても化粧したいあなたに」という本をシリーズで読んだ事が転機となりました。色々衝撃を受ける内容で、その中にステロイド剤の怖さ、恐ろしいリバウンドという副作用、ステロイド漬けにする医療のいかげんさが書かれてありました。離脱経験者のお話は、思い当たることばかりで愛用のフルコートがそんな毒薬だと知り、血の気が引きました。同じ頃、件の皮膚科医院で薬の内容明細が出されるようになりました。そこで初めて塗り薬も飲み薬も、全てがステロイド剤であったと分かりました。使うほど悪化して苦しむと分かっている薬を、先生が黙って出していたなんて！すぐには信じられませんでした。「病院は良くなるどころ、医師は絶対、薬は良いもの。」絶対だった価値観が足元からひっくり返ったショックで、本当に目の前が真っ暗でした。

そして「ステロイド剤を使うのは怖い。」と先生に相談してみました。返答は、「ステロイドは過去30年使われている薬だから大丈夫、ひどい時だけ受診する私が悪い。もっときちんと通院しなければならない。」というものでした。中学からお世話になった先生のおっしゃることでしたが、どうしても納得できず、黙って聞き流すこともできませんでした。結果、大声で怒りをぶちまけたのが最後となりました。

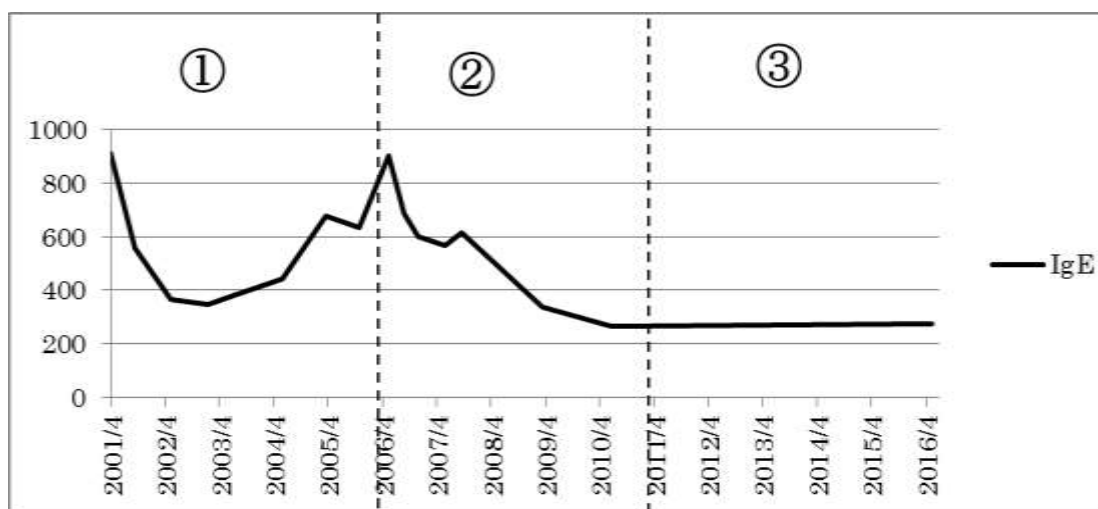
それから「どうしても・・・」の本に従いまずステロイド剤、化粧とシャンプー・リンスを止めてみました。私の場合リバウンドは徐々に現れました。ひどくなる症状に怯えつつ、ステロイド剤を使わない病院や治療を探してもがきました。顔と手にイボが大量にできたこともあります。松本医院にたどり着くまで3年近くかかったと思います。

● 松本医院に通いだしてから現在

医院をインターネットで知り、初めて受診したのは2001年(平成13年)

4月、29歳でした。最もリバウンドがひどかった頃でした。痒みで暖かい待合室にじっと座っていられず外へ飛び出しておかきむしったことを覚えています。

以来15年になります。IgE抗体は上下しつつ911から275になりました。これまでの費用は約1,162,000円。保管している領収書を集計した金額です。紛失した領収書もあるので、実際はもう少しかかっています。



① 2001年（平成13年）～2006年（平成18年）

最も悪い時でした。思い出すのも苦しく、よく生きていたと思います。とにかく体中が痒くてたまらず、体中に虫がはいり回っているようでした。痒みの発作がくると、とてもではありませんがじっとしてられません。バスや電車に乗るときは冷や汗をかきつつ、発作がこないよう祈るような気持ちでした。それでもよく途中下車して駅のトイレに駆け込み、泣きながらかきむしりました。

かきむしると、皮膚がえぐれて痛いんです。それが嫌で目をつむって掻くの我慢してみるのですが、どんなに抑えても手が勝手に震えながら痒い所に向かいます。自分ではコントロールできず何かの中毒患者のようで怖かったです。そして、結局は悲鳴をあげながら半狂乱になってかきまくりです。

皮膚は柔らかさを失い、肘や膝を曲げたり伸ばしたり、立ち上がったるときは肌が割れてしまいそうで泣くほど痛かったです。横を向くときは体ごと動かします。首だけ向けることはできませんでした。両親に向かって「何で私だけこんな目にあうの！何でお姉ちゃんだけで止めといてくれへんかったんや！」とあたることもありました。

痒くて痒くて眠れない夜は、よく泣きながら松本医院のホームページを読みました。回数を分けてよく読むと、知りたいことが詳しく書いてありました。理論が分かれば痒さ痛さに立ち向かう気力が湧きました。

なぜこんなに痒いのか、なぜ引っ掻いただけで簡単に皮膚がえぐれるのか、

じくじくとにじみ出る汗は何なのか、なぜ滲み出るのか、なぜこんなに皮膚が分厚いのか、ステロイド剤のせいとしてもなぜこんなことになるのか、何より治るのか、一体どうすればいいのか・・・など、同じ疑問を何人かの医師に問うてきました。納得いく答えを出してくれたのは松本先生だけでした。

この5年間は抗体が911→345→903と順調に下がり、また上がっています。再び上がった時期は、生理痛で毎月バファリンを飲んでいて一致しています。余談ですが、数ヵ月ぶりに漢方風呂に入ると、なぜか白眼が真っ赤になったことがあります。こんなことは初めてで、よく考えると眼科医でもらった目薬をさしたことがありました。

② 2006年（平成18年）～2011年（平成23年）

IgE抗体が903→264へと順調に下がりました。普通の生活ができていました。松本医院へは月一度程度、2011年（平成23年）は一度も受診していません。

③ 2011年（平成23年）～2016年（平成28年）

2013年（平成25年）に一度受診しただけですが、症状は年を追うごとに悪くなっていました。特に手に現れ、その後顔から首、胸、脇へと広がりました。37度程度で発熱することが増え、腰痛など色々不調を感じていました。

2016年（平成28年）、手の状態が放置できなくなり、数年ぶりに松本医院を受診しました。今度はヘルペスウイルスが原因と言われました。現在は、ヘルペスウイルスの治療中です。ヘルペスの薬を飲みだしてすぐ、腰痛が消えて驚いています。